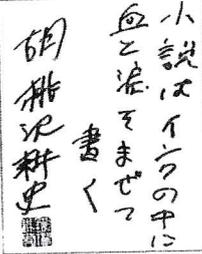


同窓生シリーズ

(8)



は、昭和十三年四月ですから、戦争の気配が日ましにくくなり、二年の頃は、文化的な雰囲気

昨年十二月七日の小春日和、『翔んでる警視』

の作者である胡桃沢耕史氏を朝陽会館二階会議室におまねきして、六中時代の思い出、直木賞受賞までのご苦労話などをお話しいただきました。

死ぬための予備軍 僕が六中に入学したの

が、昭和十三年四月です。表現は悪いけど、中学校の四月です。表は悪いけど、中学校の四月です。表は悪いけど、中学校の四月です。



胡桃沢耕史氏(本名 清水正二郎) 旧17回生(昭和18年卒業) 大正14年東京生まれ 作家 昭和58年『黒パン俘虜記』で直木賞受賞

著書：『天山を越えて』『ほくの小さな祖国』『太陽の祭り』『旅券のない旅』『夕闇のパレスチナ』『翔んでる警視』

「直木賞」受賞を決意 僕は小説を書くのが好きで、自由な職業に就こうと思つてました。直木三十五氏が亡くなったのは九歳の時で、彼の臨終から死までをラジオで放送するのが

意外でした。こんなに世間の人に愛されていたのかという事が子供心にわかって、自分もそういう人物になりたいと思つた訳です。翌年、『直木賞』が設定されたのを知って「よし、それをとつてやるの」と心に決めました。

「胡桃沢耕史」の時代

昭和四十二年から五十年まで、清水正二郎の名前を忘れてもらうため、小説は全く書かず、小さなオートバイで世界中を走りまわりました。娘の胡桃、息子の耕史の名前をもらつて、胡桃沢耕史のペンネームで五十一歳から再び小説を書き始めましたが、全く駄目でした。昭和五十八年の夏、四度目の候補で、やっと直木賞を受賞できました。

胡桃沢語録

六中時代に(授業をさぼって)たくさん映画をみた事が、シベリアの収容所で非常に役にたちました。詳細は『黒パン俘虜記』に。

試験の点数は悪いけど、こいつはトルストイ全集を全部読んでいるからと、国語の点をあげてくれる先生がいたらいいねえ。

胡桃沢氏のお話は、波瀾万丈の人生の割には、お人柄のせいかな、カラリと明るく、私達に勇気とやる気を起こさせて下さいました。百台以上のカメラと七台のビデオを持たれ、局ごとのビデオを用意されているとの事。若々しい好奇心と真実を見究める鋭い目、その目の奥の、はるか遠くを見つめる少年のような心が、胡桃沢小説の原点のような気がしました。